

伝統に生きる

—あらかわの工芸技術—



のれん染

かた やま かず お
片 山 一 雄

(平成5年度作品)

16mm 映画・ビデオ
カラー・17分

プロフィール

住所、荒川区南千住8-37-10

大正10年(1921)、東京都荒川区生まれ。

平成4年度荒川区指定無形文化財保持者に認定される。

小学校のときから、父の染色業を手伝い始めた片山さん。父・春雄氏(故人、元荒川区登録無形文化財保持者)は、12歳で向島の「型秀」というところへ型彫りの職人として修業に入った人で、現在地で染物を始めたのは大正9年のこと。保持者は、父の技を受け継ぐべく、復員後の昭和23年から正式にこの道に入った。

かつては神社の祭礼用の幟や幕などを主として製作していたが、現在は直接注文によるのれんの製作が中心になった。型彫りから染めまでの一貫した作業をこなせる職人が少なくなった現在も、子息・昭氏とともに伝統の技を守り続けている。

家族全員でのれん染に励む作業場には、いつも活気が満ち溢れている。青空の下に、染め上がったのれんがはためくさまは、汐入の街並みを彩る印象的な風景のひとつコマである。

企画 東京都荒川区教育委員会・製作 毎日映画社

用具・工具

針子、張木、筒ガネ、へら、小刀、刷毛(引き刷毛・丸刷毛など)、小箒、ふるい、張板、腕木、洗い桶、渋紙、おが屑、染料(藍など)、顔料(石灰と松煙炭でつくる)、糊(糯米を蒸して練ったもののなかに、糠・石灰・顔料・防染材を混ぜてつくる)、酸、ご汁(大豆の汁)など。



工程

- (1) 型紙に書かれた文字や模様を小刀で切る。
- (2) 糊を塗った張板に水をかけ、刷毛で全体を濡らし、その表面に木綿や麻などの生地をピンと伸ばして張る。
- (3) 文字や模様の割付をする。
- (4) 生地を表地に型紙をあてて糊付し、さらに型紙をはずして、おが屑をかける。
- (5) 日光に干す。
- (6) 同様の工程を、生地裏地にも施す。
- (7) 糊が乾いたら、ご汁(大豆の汁)と顔料でつくった液で「引き染め」し、再び干す。
- (8) 色を留めるため、乾いた生地をボイラーで蒸す。
- (9) 薄い藍甕に2回、濃い藍甕(濃甕)に3回、生地を浸す。
この工程では、浸した生地を腕木に屏風状に吊し、「風を切る」(水を切ること)作業を繰り返す。
- (10) 染め上げた生地を、一晚、水槽に浸す。
- (11) 酸を加えた別の水槽に生地を浸し、糊や染料の芥を洗い落とす。
- (12) 干して乾燥させる。
- (13) 裁断してのれんに縫製し、仕上げる。



利用される方は……………☎**3891-4349**

この記録〈16ミリ映画〉、〈ビデオテープ〉は、荒川区荒川図書館で貸し出しています。
貸し出し期間は、1回5日間です。お気軽にご利用ください。

※16ミリ映画は、団体登録と16ミリ映写機講習修了者が操作することが必要です。